広島派遣レポート

糸魚川中学校　２年４組　金子　智成

私がこの派遣事業を通じて最も戦争の恐ろしさを実感したのは、被爆者講話と平和記念資料館の見学の二つの体験でした。

まず、最初の体験は「被爆者講話」でした。講話をしてくださったのは、多賀俊介さんという被爆二世の方でした。多賀さんは「原爆被爆を語り継ぐ会」のメンバーとして活動していて、被爆の記憶を次の世代に伝えるための重要な役割を果たしています。彼のお話の中で特に印象に残ったのは、「日本は世界で唯一の被爆国であり、この語り継ぐ会を絶対に残していきたい」という強い意志が込められた言葉でした。そして、多賀さんは「実際に被爆した人々の数が年々減少している中で、特に若い世代に対して、もっと関心を持ってほしい」と話していました。

講話の中で、熱線で表面がブツブツになった瓦を見せて、彼の家族が体験した恐怖や苦しみを交えて話を進めていただきました。特に心に残ったのは「実際に原爆の爆発を体験することはできないけれど、被爆した物に触れたり、被爆者の感情を読み取ったりして、自分自身で感じることが大切だ」という言葉でした。例えば、鉄さえも溶かしてしまうほどの熱線を自分が受けたとしたら、一体どうなってしまうのか。その熱線によって皮膚が剥がれ落ち、内臓が飛び出してくるということは、どれだけの苦痛なのか。多賀さんのお話を通じて、私はこれまで考えたことのないような多くのことを、深く考えることができました。

二つ目の体験は、平和記念資料館の見学でした。この資料館では、被爆者がそ

の時に見た光景を描いた絵や、遺品がたくさん展示されていました。遺品のそばには、その持ち主がどんなことを感じ、どのような思いを抱いていたのかが書かれており、その言葉の一つ一つが遺品と重なり合って、これまでに感じたことのない複雑な気持ちになりました。

資料館の展示の中で特に印象に残ったのは、爆発の瞬間である８時 15 分で止まった懐中時計や、被爆で真っ黒に焼け焦げた子供の三輪車などでした。これらの物は、ただの展示物ではなく、当時の人々の生活やその瞬間の悲劇を象徴していました。これらの展示品を見るたびに、戦争の悲惨さや、何の罪もない人々が一瞬にして命を奪われたということを改めて強く感じることができました。

日々、化学やコンピューターなどは進化し、日常の便利なものとして浸透しています。一方その進化で、より強力な兵器を作ることができるでしょう。決してそうならないように、世界中の人々が戦争に反対する心を持たないといけません。では今、自分にできることを考えてみると、今回感じた戦争の恐ろしさを少しでも周りの人に伝えていくことだと思います。